

遅々として進まぬ原稿—パソコンの画面というべきか—に向かい合っていると、自分自身のことは棚に上げ、社会福祉研究の進め方や評価のあり方などについて、いろいろと雑念が湧いてくる。その一端を披露して緒言の責めを果たしたいと思う。

私は本務校である東洋大学の社会福祉学専攻の院生諸君と社会福祉理論研究会という自主ゼミを行っている。名称は大げさであるが、内容は毎年、戦後を中心に社会福祉学の先達に学ぶということで、著名な先生方の著作を読むことに決めている。大河内一男、孝橋正一、岡村重夫、竹内愛二、木田徹郎、嶋田啓一郎、近くでは一番ヶ瀬康子、高島進、真田是、三浦文夫などの諸先生の著作をその年の新入生を中心にレポートして貰うのである。最近の経験として考えさせられるのは、院生でも大河内はおろか孝橋、岡村、竹内、木田という先生方について名前だけは聞いたことがある、なかには名前も知らない、という状況がみられることである。30代、40代前半の研究者のなかにも、もはやそうした先生方の時代ではない、という向きも多いが、いかがなものだろうか。戦後の社会福祉研究の成果をきちんと咀嚼継承し、その批判の上に新しい研究を展開したいものだと思う。

他方、もう少し上の年代の研究者のなかには、逆に諸先生方の業績に少々拘り過ぎておられるのではと思わせるような言説もみうけられる。諸先生方の胸を借りて独自の言説を展開する方法もあるが、お釈迦様の手のひらの広さ、奥深さを再確認し、賛嘆することに終始するかのような議論にはいささかの疑問を禁じえない。孝橋や岡村の理論が偉大なことには何の異存もない。しかし、両先生ともに学界に登場されてすでに50年である。諸先生方の業績の偉大さ、理論の強靱さはもとよりのこととして、隣接の学界にもこういう例は少ないであろう。社会福祉学研究の未熟さや困難さはその通りであるが、そのことを指摘するだけでは道は開けない。時に、研究者には自説を展開するリスクをおそれず、道化師に終わることを厭わぬ蛮勇も必要とされるのではないか。

ところで、先学の業績に学ぶというが、その学ぶはまねるという意味にはじまるとされる。確かにその通りであろう。後学は先学のまねをして、一步でも先学に近づきたいと願い、努めるのである。私も、若いころ、小説家はこれと目する大家の小説を筆写し、文章や小説の作法を学ぶのだと聞き、ある研究者の文章を意識してまねたことがある。その成果といえば、この文章をお読みいただければ一目瞭然であろう。学ぶことはそれほど簡単ではない。まねて学ぶことは文章術ですら困難であるが、先学の学説やアイデアをまねて学ぶということになると、成果の評価はさらに困難であり、時にはやっかいなことにもなりかねない。まねて学んでいるうちに自他の区別がつかなくなることもある。天知る地知る、そして我知る、である。もとより私を含めて、自戒したいものである。

同工異曲という言葉がある。若い世代には耳慣れない言葉かもしれないが、私に対する批判の言である。理論がないともいわれる。たしかにそうかもしれない。反論するつもりはないが、根が器用な方ではないから書いてみないとわからないことが多い。発言の内容に論理的な整合性があるかどうか、体系性があるかどうか、書いてみて確かめるのである。リスクではあるが、思いつきを思いつきに終わらせずに、少しでも定着させたいという思い、願いがある。最後はグチになってしまった。雑感と題する所以である。